香南市、探究のサテライトキャンパス化計画 ―空港30分、高速

やっぱり香南市がえい！香南市魅力発掘プロジェクト（香南市・FLASPO）応募企画書［公開用］

企画内容

① 香南市のどんな魅力に注目したか、選んだ理由と合わせて教えてください

「学びの場」としての香南市に注目しました。

香南市には空港・高速IC(3か所)・鉄道駅(5駅)が揃い、都市部から半日圏内でアクセスできる「便利な田舎」という強みがあります。一方で、この便利さゆえに観光客に素通りされてしまう課題があると知りました。

しかし、この立地の良さは「観光」より「教育」で活きると考えました。全国的に高校の「総合的な探究の時間」が拡充されている今、フィールドワーク先として"近くて、何度でも通える地域"へのニーズが高まっています。香南市は離島や山間部にはない「反復訪問のしやすさ」を持っており、これは全国でも珍しい教育資源だと考え、この魅力に注目しました。

② その魅力をもとに、若者が「関わってみたい」と思える企画・コンテンツを提案してください

・目的： 香南市を、高校生が繰り返し訪れ学び続ける「探究のサテライトキャンパス」にする。一度きりの観光ではなく、事前学習→現地訪問→提言という継続的な関わりを通じて、若者が香南市を「自分ごと」として関わり続けるきっかけをつくる。

・ターゲット： 高知県内〜関西圏の高校で「総合的な探究の時間」を担当する教員・生徒(まずは1〜2校のパイロット校)

・企画概要：香南市の地域資源を「観光の対象」ではなく「探究の教材」として再編集します。

ニラ・みかん農業 →「農業経営・データ分析」の教材

想定津波13mという防災課題 →「地域科学・防災」の教材

人口減少そのもの →「政策立案」の教材(市長への提言と直結)

事前学習(オンライン)・現地フィールドワーク(1泊2日)・事後学習(オンラインでの提言まとめ)の3段階をワンセットにすることで、単発の見学で終わらない「探究」として設計します。

③ 具体的な企画の行程・実施イメージを教えてください

事前(訪問の2〜3週間前・オンライン)

香南市役所担当者・地域おこし協力隊とのオンライン顔合わせ

香南市の基礎データ(人口減少率、農業産出額、津波想定など)を使い、生徒が個人またはチームで「問い」を設定

現地1日目

午前:香南市役所訪問、地域課題のレクチャー

午後:テーマ別フィールドワーク(農家訪問/手結港・防災現場視察/道の駅での産品調査など、チームごとに分岐)夜:宿泊施設で1日の振り返りワーク現地2日目午前:フィールドワークの続き、追加取材午後:

チームごとに提言をまとめ、市長・副市長・教育長への提言発表事後(帰校後・オンライン)校内発表用に提言を再編集香南市側からのフィードバックをオンラインで受け取る(関係の継続)

④ そのアイデアをどうやって若者に届けるか、発信方法・広め方を教えてください

生徒個人へのSNS発信ではなく、教員コミュニティ経由での広がりを主軸にします。理由は、総合探究のフィールドワーク先を決めるのは生徒個人ではなく学校・教員だからです。
総合的な探究の時間を担当する教員向けの研修会・教育委員会主催の情報交換会での事例紹介パイロット校での実施後、生徒の提言内容や成果を市の広報・地元メディアで発信し、「実際に政策に声が届く探究」という実績を可視化実施校の教員に「他校への紹介者」になってもらう、口コミ中心の展開(教育旅行の意思決定は教員間の信頼で動くため)

⑤ あなたの企画に参加した若者は、どのように香南市への興味・関わりが変化すると思いますか

・参加前： 香南市を「知らない、通過する場所」として認識。地元の課題を自分と関係ないものと捉えている状態。
・参加中： 自分たちの問いに基づいて地域を歩き、人に話を聞くことで、香南市の課題が「自分の意見を求められている当事者ごと」に変わる。提言が市長に直接届く経験を通じて、地域への発言に手応えを感じる。
・参加後： 一度きりの訪問で終わらず、「自分の提言がどうなったか気になる」という継続的な関心が生まれる。進学・就職後も帰省時に立ち寄る、後輩や別の学校に香南市を薦める、といった形で関係人口化していく。
⑥ 1泊2日のフィールドワークでは、どこを訪問して何を確かめたいですか
農業の現場(ニラ・みかん農家):日本一・県内一の生産量を支える経営の工夫と、後継者不足の実態を確かめる手結港周辺・沿岸部:南海トラフ巨大地震で想定される津波の危険性と、現地の防災対策の実態を確かめる道の駅・直売所:地域資源がどう商品化され、どんな人に届いているかを確かめる香南市役所:人口減少対策として何が検討されているか、行政側の生の課題感を知る

⑦その他、工夫した点、補足となる資料・スライドなどがあれば記入・添付してください

1. 「海士町型」との違いを明確にした設計
教育×地域活性化というと、島根県海士町の隠岐島前高校魅力化プロジェクト(生徒の移住・全寮制)が全国的に知られています。
しかし香南市には離島のような隔絶性はなく、逆に空港・高速3IC・鉄道5駅という抜群のアクセスがあります。そこで本企画は「生徒に移住してもらう」のではなく、「都市部の学校が何度でも身軽に通えるフィールド」という、香南市の立地だからこそ成立するモデルを目指しました。
2. 単発の見学で終わらせない設計
探究学習は本来、問いを立て、調べ、まとめるサイクルの反復が本質です。そのため現地訪問だけで完結させず、事前学習→現地フィールドワーク→事後学習・提言の3段階を必ずセットにしました。これにより、1回きりの観光的な訪問ではなく、生徒が香南市と継続的に関わる設計にしています。

3. 初年度は小さく、無理のない規模から
学校の教育旅行・探究フィールドワーク先は1〜2年前に決まることが多いため、初年度から大規模な集客は狙わず、まず1〜2校とのパイロット実施にとどめます。ここで教材(農業経営、防災、政策立案など)と受け入れノウハウを固めた上で、2〜3年目以降に他校・大学へ展開する段階的なロードマップとしています。
4. 新規組織を作らず、既存の体制で回す
専門の中間支援組織を新設するのではなく、市役所・地域おこし協力隊・農家・観光協会など既存の人材・関係性を「探究コーディネーター」役として活用することで、初期コストを抑えて始められる設計にしています。
5. 将来的な財源の広がり
文部科学省は大学と地方公共団体が協働する「COC+R」など、地域連携教育を支援する事業を全国で展開しています。高校パイロットで実績を作った後は、こうした大学向けの既存制度への接続も視野に入れており、市の単独予算に頼り続けない拡張性を持たせています。

※応募内容のうち、氏名・住所・出身地などの個人情報、アンケート回答、図表・添付資料、外部リンクを除いて掲載しています。企画書の著作権は考案者に帰属します。